

# 大学運動部に所属するアスリートの心理的特性に関する研究 —大阪私立大学グループスポーツ競技種目の新入生女子アスリートに着目して—

松山博明\*・中村泰介\*\*・二宮博\*\*\*・武藤克宏\*\*\*\*  
巽樹理\*・馬込卓弥\*・辰本頼弘\*

追手門学院大学\*, 園田女子大学短期大学部\*\*  
バリエンスホールディングス\*\*\*, ギラヴァンツ北九州\*\*\*\*

## Psychological characteristics of athletes in university athletic clubs —Focusing on Freshmen Female Athletes in Osaka Private University Group Sports Events—

Hiroaki MATSUYAMA<sup>1)</sup>, Taisuke NAKAMURA<sup>2)</sup>  
Hiroshi NINOMIYA<sup>3)</sup>, Katsuhiko MUTO<sup>4)</sup>, Juri TATSUMI<sup>1)</sup>,  
Takuya MAGOME<sup>1)</sup>, Yoshihiro TATSUMOTO<sup>1)</sup>,  
(Otemon Gakuin University)<sup>1)</sup>, (Osaka Otana University)<sup>2)</sup>  
(Valuence Holdings Inc.)<sup>3)</sup>, (Giravanz Kitakyushu Football Club)<sup>4)</sup>

### 抄録

本研究では、2018年から過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生を対象にDIPCA.3を行った。その結果、以下の内容が明らかになった。男女の比較では、男子が女子に比べて、6尺度の値が有意に高値を示した。一方で、女子が男子に比べて、2尺度の値が有意に高値を示した。このことから、先行研究と同様の結果になった。総合得点の比較では、新入生は、他大学と比較して高値を示した。このことから、新入生は主にスポーツ推薦等で合格したある一定の全国レベルの学生が多く存在したため、心理的競技能力も他大学と比較して高値になったと考えられる。12下位尺度による比較結果から、新入生は、5尺度が他大学と比較して高かった。しかしながら、4尺度が他大学と比較して低値であった。今回、調査の対象になった新入生は、全国レベルであったこと、調査時期がいずれも試合期に実施したこと、スポーツ経験10年以上が多いこと、チームスポーツであったことから高値を示したことにつながったと考えられる。新入生3クラブによる比較結果から、チア部はサッカー部と比較して、3尺度が高値であった。サッカーやラグビーといった競技性とは違い、2分30秒という短い時間の中で、自信を持ち、瞬時の決断力や判断力が要求されるスポーツであるため、優位に高値な差になったと考えられる。

**Key Word: University, student, Gender, DIPCA.3**

## 1. 緒言

近年、日本でも女性アスリートの活躍が目立つようになってきた。オリンピック競技大会（以下：オリンピック大会とする）に参加する日本の女性選手の数、第25回オリンピック大会（1992/バルセロナ）まで男性の半数にも及ばなかったが、第26回オリンピック大会（1996/アトランタ）では、男性160名、女性150名とその数は急速に拡大した。その後の第27回オリンピック大会（2000/シドニー）では、参加者数は男性に及ばなかったものの、メダル獲得数で初めて男性を上回り、第28回オリンピック大会（2004/アテネ）では男性141名、女性171名と初めて女性の参加者数が男性を上回った（日本オリンピック委員会, online）。このように日本のスポーツ界においても変化が見られるようになった。

文部科学省委託事業として「女性アスリートの育成・支援プロジェクト」がスタートし、主にスポーツ医学やスポーツ生理学の領域より調査研究や介入研究、サポートシステムの活用及び、トランスレーショナル研究が推進されている。その成果が、カンファレンスやシンポジウムにて発信されていることに加え、アウトリーチ活動が積極的に展開されていることで、女性アスリートの競技環境が徐々に整っていることが伺える。しかしながら、国策として、女性アスリートの育成・支援プロジェクトに加え、発掘・育成・強化事業が推進される過程にて新たな課題として挙げられるのが、心理面のサポートがタレント及び強化アスリートにリーチできていないことである。特に、育成年代のタレント（U-15世代～U-20世代のユース全般）が、発達に伴う著しい心身の成長の中で女性アスリート特有の課題に対応し、競技力向上につなげるための心理的なサポートは必要不可欠であると考えられる（實宝ら, 2019）。

これまで、性差に関する先行研究では、女性アスリートは男性アスリートに比べて、全体的にストレス反応が高いことが明らかとなっている（渋谷ら, 1999）。福井ら（2014）の自立したスポーツ活動が求められる大学生アスリートに着目し、彼等の不安と競技能力の関係と不安の特徴を明らかにすること、そして不安を持ちながらも優秀な競技成績を残した大学生アスリートを選出することを目的とした。本研究の結果と考察から、スポーツに関わる大学生アスリートの不安と競技能力の関係について、不安に対処する際の性差や種目への考慮の必要性などが確認された。これにより、スポーツの競技現場でアスリートが不安と向き合う際に、桜井（2009）が体力面での性差を比較し、その違いを言及しているように、性別や競技種目等のパーソナリティによって差があり、その都度捉え方を変える必要があることが言える。また、関わる指導者は本間（2009）が指導者における性差の認識について言及しているように、対象のアスリートの性別における個別の対応を検討する必要があることが提言出来る。このことから、心理的な競技能力の研究においては、スポーツ別および大会別における調査や研究だけでなく、大学運動部に所属する女子アスリートにも注目して研究する必要があると考えられる。そこで本研究では、2018年から過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生女子アスリート（以下：新入生）を対象に心理的競

技能診断検査（Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes：以下DIPCA.3とする）を行った。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調査対象と調査時期

過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生の女子サッカー部（以下：サッカー部）（n=25）、チアリーディング部（以下：チア部）（n=23）、女子ラグビー部（以下：ラグビー部）（n=12）、合計60名（ $18 \pm 19$ 歳）の3種目を対象とした。また、過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生男子アスリートの男子サッカー部（n=59）、男子ラグビー部（n=65）、硬式野球部（n=80）、アメフト部（n=24）、洋弓部（n=7）、合計236名（ $18 \pm 19$ 歳）の5種目を対象とした。

調査時期は、2018年12月5日、2020年1月6日、2020年12月8日、2021年7月12日の合計4回実施した。

### 2.2. 調査方法

DIPCA.3による以下の調査を行った。

- (1) 男女による比較を検討した。
- (2) 総合得点の比較を検討した。
- (3) 12下位尺度による比較を検討した。
- (4) 新入生3クラブによる比較を検討した。

### 2.3. 調査内容

調査は、研究者本名が大学に出向き参加の同意の承諾を得た上で、DIPCA.3の質問紙の調査の目的などを簡潔に説明し、筆者が測定・検査結果を大学で回収した。統計処理については、本実験において得られた測定値について、全ての統計にはIBM SPSS Statistics 21.0を使用して、*t*検定と一元配置分散分析を行った。さらに、そこで有意差を認められたものについてはBonferroniの多重分析を行った。なお、それらの統計上の有意水準は5.0%とした。

## 3. 結果

### 3.1. 男女の比較

過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生アスリート（男女）による比較結果は以下の通りであった（表1）。

表1. 男女によるDIPCA.3の比較

項目(12因子)	男子(n=235)	女子(n=60)	t 値
忍耐力	15.15 3.02	15.85 2.77	-1.68 ns.
闘争心	16.66 3.11	17.27 2.93	-1.43 ns.
自己実現意欲	15.56 3.06	16.50 2.31	-2.25 *
勝利意欲	15.56 3.00	16.05 2.36	-1.41 ns.
自己コントロール能力	13.86 3.43	12.62 4.17	2.10 *
リラックス能力	12.72 3.68	10.73 4.05	3.66 *
集中力	14.84 3.36	14.53 3.52	0.62 ns.
自信	12.59 3.28	11.25 3.72	2.74 *
決断力	13.20 3.12	11.88 3.90	2.43 *
予測力	13.16 2.92	11.62 3.35	3.50 *
判断力	13.11 3.23	11.67 3.65	3.04 *
協調性	16.77 2.86	18.12 2.17	-4.08 *

\*: p<00.5, n.s.=not significant

### 3.1. 総合得点の比較

過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生の総合得点による平均値の比較結果は以下の通りであった(表2).

表2. 総合得点による比較(平均値)

項目	大阪私立大	私立大	国立大	全体
総合得点	167.0	167.2	160.0	164.4

### 3.2. 12下位尺度の比較

過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生の12下位尺度による比較結果は以下の通りであった(表3).

表3. 大阪私立大学と他大学の比較(徳永ら, 2015)

項目	大阪私立大	私立大学	国立	全体
忍耐力	15.78	14.34	12.94	13.79
闘争心	17.08	16.07	15.16	15.71
自己実現	16.42	17.16	15.51	16.51
勝利意欲	15.93	15.19	13.47	14.52
自己コントロール能力	12.52	14.17	14.44	14.27
リラックス能力	10.65	12.08	12.69	12.32
集中力	14.48	15.43	15.78	15.57
自信	11.20	11.29	11.21	11.26
決断力	11.78	11.88	11.69	11.81
予測	11.50	11.29	10.85	11.12
判断力	11.65	11.49	11.38	11.45
協調性	17.98	16.79	14.9	16.05
合計	167.0	167.18	160.02	164.38

### 3.4. 新入生3クラブによる総合得点の比較

過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生3クラブによる比較結果は以下の通りであった(表4)。

表4. クラブによるDIPCA.3の比較

項目(12因子)	女子サッカー部 (n=25)	チアリーディング部 (n=23)	女子ラグビー部 (n=12)	F 値	多重比較結果
忍耐力	15.92 2.14	15.70 3.65	15.67 2.84	0.05	ns.
闘争心	17.80 2.25	16.65 3.42	16.42 3.87	1.18	ns.
自己実現意欲	16.56 1.96	16.26 2.85	16.42 2.19	0.09	ns.
勝利意欲	16.28 2.03	15.70 3.01	15.67 2.35	0.41	ns.
自己コントロール能力	10.92 3.34	13.35 4.43	14.25 4.22	3.68	ns.
リラクセス能力	9.72 4.10	11.26 4.07	11.42 3.48	1.18	ns.
集中力	13.56 3.22	15.22 3.52	15.00 3.98	1.52	ns.
自信	9.72 2.49	9.72 2.49	11.50 3.55	4.22	* テア>女子サッカー
決断力	10.08 2.60	13.39 4.15	12.25 4.07	5.30	* テア>女子サッカー
予測力	10.60 2.35	12.43 3.89	11.58 3.60	1.89	ns.
判断力	10.20 3.07	13.00 3.87	12.08 3.34	4.06	* テア>女子サッカー
協調性	17.40 2.24	18.91 1.68	17.42 3.20	3.12	ns.

\*:  $p < .05$ , ns.=not significant

## 4. 考察

### 4.1. 男女の比較

過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生アスリート(男女)による各因子別分析結果から、男子が女子に比べて、自己コントロール能力( $t$ 値=-2.10,  $p < 0.5$ ), リラクセス能力( $t$ 値=3.66,  $p < 0.5$ ), 自信( $t$ 値=2.74,  $p < 0.5$ ), 決断力( $t$ 値=2.43,  $p < 0.5$ ), 予測力( $t$ 値=3.50,  $p < 0.5$ ), 判断力( $t$ 値=3.04,  $p < 0.5$ )の値が有意に高値を示した。

徳永(1991a; 1991b)は、平成2年度国民体育大会福岡県選手の性差を比較した結果、男子が忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、リラクセス能力、自信、決断力、予測力、判断力で有意に高得点を示したことを報告している。また、同様に徳永ら(2000)によると男子は女子に比較して判断力、自信、予測力、決断力で最も顕著な差が認められ、そのほか闘争心、自己コントロール能力で有意に高い平均値を示した。また、忍耐力、リラクセス能力でもやや高い平均値がみられたと報告している。このことから、過去3年間の大阪私立大学運動部に所属するスポーツ競技種目の新入生男女においても同様の結果になった。

一方で、女子が男子に比べて、自己実現意欲( $t$ 値=-2.25,  $p < 0.05$ ), 協調性( $t$ 値=-4.08,  $p < 0.05$ )の値が有意に高値を示した。徳永ら(2000)によると県立のスポーツ施設で受検した多くのスポーツ選手の調査結果から、女子は自己実現意欲で有意に高かったと報告している。同じく、高校生に限定して性差を比較しても、女子では自己実現意欲と協調性で有意に高い得点を示した。岩淵(2009)は、昨今の少子化の中で、女の子であるからといって、その子の潜在的可能性に早くから着目し、その顕在化のための励まし・指導・助言・教育(学習)訓練を行うことをためらうことが、少なくなってきたようである。とりわけ、芸術、スポーツの世界では、いま日本の女性は世界で最も元気であるとも言われていると述べている。女性は、男性と比較し自己実現意欲である可能性への挑戦や主体性、自主性をもって行動できていると言える。

協調性において、古谷ら（1992）は大学女子ソフトテニス選手の調査で、男子より女子が協調性に優れていると報告している。徳永（1999）は全国ジュニアテニス選手を対象に女子は協調性で有意に高得点を示したことを報告している。村上ら（2004）も男性と比較して、女性は協調性に優位に高値であったと述べている。杉山（2017）によると男性と違って女性は特定のグループと関わるシーンが多いため、その中で自分の立場を確立するために周りに合わせることが一因として考えられる。このことから、過去3年間の大阪私立大学運動部に所属するスポーツ競技種目の新入生性差においても同様の結果になった。

#### 4.2. 総合得点の比較

総合得点による比較結果から、新入生は、他大学と比較して高い数値を示した。DIPCA.3の総合得点評価においては、3（もう少し）の判定であった。また、これまでの先行研究から、徳永ら（2000）は総合得点では男性と比較し女性は低い平均値を示していると報告している。しかしながら、女性に限定したレベルと比較すると新入生は、全国大会レベルであった（徳永、2000）。このことから、新入生は主にスポーツ推薦等で合格したある一定の全国レベルの学生が多く存在したため、心理的競技能力も他大学と比較して高値になったと考えられる。

#### 4.3. 12下位尺度による比較

12下位尺度による比較結果から、新入生は、忍耐力、闘争心、勝利意欲と判断力、協調性が他大学と比較して高かった。特に闘争心の数値が他大学と比較して、高値を示した。しかしながら、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信が他大学と比較し低値であった。

忍耐力と判断力については、徳永ら（2000）によると競技レベルの高い選手ほど判断力で顕著に優れ、そのほか忍耐力で優れていることが明らかであると述べている。新入生は、他大学と比較して全国大会レベルで、競技レベルが高く、忍耐力である我慢強さや粘り強さ、苦痛に耐えることや判断力である的確な判断や冷静な判断、素早い判断が優れていると考えられる。

闘争心について、杉山ら（2017）によると、競技年数を重ねれば重ねるほど、試合機会も増え、ある程度の実力が基礎として備わっていくので、「新たに力（技術）を試したい」、「もっと戦いたい」という気持ちに大きく影響していくのではないかと考えられる。

勝利意欲に関して、競技をする目的の変化が理由として考えられる。初めは友達の誘いや興味があったからというきっかけで競技を始めるが、競技年数が長くなるほど専門性が高まるので「勝ちたい」という意欲に繋がっていることが考えられる。田中（1994）の研究でも、スポーツの経験年数が約8年の学生24名を対象にした調査において、練習の目的が「試合に勝つため」の割合が多かったことから、経験年数が長いと勝利意欲が高い傾向にあることがわかる。

このことから、今回、調査の対象になった新入生は、調査時期がいずれも試合期に実施したこと（西野、2013）、スポーツ経験10年以上が多いことから、闘争心や勝利意欲が特に高い数値を示したことに繋がったと考えられる。

次に、協調性に関しては、対象であった新入生のクラブは、女子サッカー部、チアリーディング

グ部、女子ラグビー部はいずれも「チームスポーツ」であった。杉山ら（2017）による研究結果からも協調性の因子において「チームスポーツ」が「対人スポーツ」よりも有意に高い結果となった。「チームスポーツ」と「個人スポーツ」、「対人スポーツ」を比べて明らかに異なる点は、試合中に味方が近くにいるか、そうでないかである。つまり「チームスポーツ」は他の種目と違い、味方が近くにいることによって心理面に大きな影響を受けるということが考えられる。このことから、新入生の協調性が高かった理由として、「チームスポーツ」の学生であったため高い値になったと考えられる。

#### 4.4. 新入生3クラブによる総合得点の比較

新入生3クラブによる比較結果から、チア部はサッカー部と比較して、自信、決断力、判断力が高値であった。チアの競技特性から、ほかのスポーツ同様、技術、体力に合わせて精神面が大きく左右するスポーツである（田中ら、2004）。特に演技の際、失敗に対する不安感など大きく影響する。また、チアの競技会における採点基準は、元気さ、笑顔、技の正確性、完成度、難易度、連続性、スピード感・同調性など採点項目は細則に渡り、競技は定められたルールに沿って競われる。競技時間2分30秒の最後まで、持ち前のチームワークと極限の集中力を持続させながら100パーセントの演技を成し遂げようとする、『笑顔の真剣勝負』である。そのため、個人的ではなく団体で演技を行うため、お互い尊重しあい、自信と瞬時の決断、判断がより要求されるスポーツである。また、田中ら（2004）によると、調査結果から、大会3か月前から大会2日前までに、自己実現力、自信、予測力が3か月前より5%水準で高い数値を示した。また、判断力において、1%水準で高い数値を示したと報告されている。このことから、サッカーやラグビーといった競技性とは違い、2分半という短い時間の中で、自信を持ち、瞬時の決断力や判断力が要求されるスポーツであるため、優位に高値な差になったと考えられる。

## 5. まとめ

本研究では、2018年から過去4年間の大阪私立大学運動部に所属する新入生を対象DIPCA.3を行った。その結果、以下の内容が明らかになった。

### 5.1. 男女の比較

新入生アスリート（男女）による各因子別分析結果から、男子が女子に比べて、自己コントロール能力、リラックス能力、自信、決断力、予測力、判断力の値が有意に高値を示した。

一方で、女子が男子に比べて、自己実現意欲、協調性の値が有意に高値を示した。このことから、過去3年間の大阪私立大学運動部に所属するスポーツ競技種目の新入生性差においても同様の結果になった。

### 5.2. 総合得点の比較

総合得点による比較結果から、新入生は、他大学と比較して高値を示した。DIPCA.3の総合得

点評価においては、3(もう少し)の判定であった。また、これまでの先行研究から、徳永ら(2000)は総合得点では男性と比較し女性は低い平均値を示しているが、女性に限定したレベルと比較すると新入生は、全国大会レベルであった。このことから、新入生は主にスポーツ推薦等で合格したある一定の全国レベルの学生が多く存在したため、心理的競技能力も他大学と比較して高値になったと考えられる。

### 5.3. 12下位尺度による比較

12下位尺度による比較結果から、新入生は、忍耐力、闘争心、勝利意欲と判断力、協調性が他大学と比較して高かった。しかしながら、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信が他大学と比較し低かった。今回、調査の対象になった新入生は全国レベルであったこと、調査時期がいずれも試合期に実施したこと、スポーツ経験10年以上が多いこと、チームスポーツであったことから、高値を示したことにつながったと考えられる。

### 5.4. 新入生3クラブによる総合得点の比較

新入生3クラブによる比較結果から、チア部はサッカー部と比較して、自信、決断力、判断力が高値であった。チアの競技特性から、ほかのスポーツ同様、精神面が大きく左右するスポーツである。特に演技の際、失敗に対する不安感など大きく影響する。また、チアの競技会においての採点基準は、元気さ、笑顔、技の正確性、完成度、難易度、連続性、スピード感・同調性など採点項目は細則に渡り、競技は定められたルールに沿って競われる。競技時間2分30秒の最後まで、持ち前のチームワークと極限の集中力を持続させながら100パーセントの演技を成し遂げようとする、『笑顔の真剣勝負』である。そのため、個人的ではなく団体に演技を行うため、お互い尊重しあい、自信と瞬時の決断、判断がより要求されるスポーツである。このことから、サッカーやラグビーといった競技性とは違い、2分30秒という短い時間の中で、自信を持ち、瞬時の決断力や判断力が要求されるスポーツであるため、優位に高値な差になったと考えられる。

## 参考文献

- 福井邦宗, 土屋裕陸, 豊田則成 (2014) 大学生アスリートにおける不安と実力発揮の関係—特性不安と心理的競技能力に着目して—研究紀要, Vol. 11, 71-77.
- 古谷学, 谷口幸一 (1992) 学生ソフトテニス選手の心理的競技能力に関する研究. 九州体育学研究, Vol. 7, 29-38
- チアリーディングとは  
[https://www.fjca.jp/cheerleading/contents\\_01.php](https://www.fjca.jp/cheerleading/contents_01.php) (2021年12月3日参照)
- 本間三和子 (2009) 指導者と性差. 体育の科学, Vol. 59, No. 9, 594-598.
- 岩淵剛 (2009) 女性の生き方: 自己実現と共生. 岡崎女子短期大学研究紀要, Vol. 43, 55-61.
- 西野明 (2013) 女子サッカー選手と女子ラクロス選手の心理的競技能力について. 千葉大学教育学部研究紀要, Vol. 61, 173-176.
- 桜井伸二 (2009) 体力・運動能力にあらわれる性差. 体育の科学, Vol. 59, No. 9, 587-593.
- 洪倉崇行, 小泉昌幸 (1999) 高校運動部員用ストレス反応尺度の作成. スポーツ心理学研究, 26(1), Vol. 26, No. 1, 19-28.

- 杉山卓也（2017）大学運動部に所属するアスリートの心理的特性に関する研究．静岡大学教育学部研究報告，人文・社会・自然科学篇，Vol. 67, 273-283.
- 高松短期大学紀要，Vol. 25, 25-34.
- 田中博史，森口哲史，大嶽真人，須田芳正（2004）チア・リーディング選手における大会前のメンタルコンディションに関する研究．大東文化大学紀要，自然科学，Vol. 42, 51-60.
- 田中美季（1994）高等学校の運動部活動の現状と課題－生徒のからだところの側面から－，
- 徳永幹雄，金崎良三，多々納秀雄，橋本公雄，高柳茂（1991a）スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発．デサントスポーツ科学，Vol. 12, 178-190.
- 徳永幹雄（1991b）スポーツ選手の心理的競技能力の診断とトレーニングに関する研究．平成2年度文部省科学研究費補助金一般研究B）研究成果報告書．九州大学健康科学センター内，pp. 13-23, 37-40.
- 徳永幹雄（1999）T.T式ベストプレイへのメンタルトレーニング・システム，手引き一トヨーフィジカル発行．
- 徳永幹雄，吉田英治，重枝武司，東健二，稲富勉，齊藤孝（2000）スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差，競技レベル差，種目差．健康科学，Vol. 22, 109-120.
- 財団法人日本オリンピック委員会．<http://www.joc.or.jp/olympic/sanka/>（2021年8月15日参照）
- 實宝希祥，奥野真由，片上絵梨子，近藤みどり，清水聖志人，土屋 裕睦（2019）女性アスリートが抱える心理的課題の抽出女性エリート選手への心理サポートプログラム開発へ向けた取り組み，Journal of High Performance Sport，Vol. 4, 42-49.